

一席 沖縄県知事賞

雀一羽

友利 榮吉

北中城村は緑豊かな住みよい村である。ここに三十代の終りに夫婦で住むようになってから四十年余りが経ち、今や互いに白髪の老人になった。

当初は地方道八十一号線を走る車も少なく、仲順の交叉点辺りから渡口へと向かう下り坂の車道の右手に今もある繁みの一面は、時に虫たちの美しい鳴き声が広がり風情があった。住家の周りではタイワンクツワ

ムシ、コオロギ、キリギリスなどの虫の鳴き声、季節を告げに飛来するアカシヨウビンやホトトギス、サシバの姿も近くの空で見られた。

時代とともに社会環境が変わっていくのはしかたがないとしても、日頃人里のまわりに現われ親しまれてきたこの小さな生き物たちがいつの間にかいなくなっている。

私は戦時中の台湾の疎開地や引き揚げ後の田舎での暮らしの中で虫や鳥たちの鳴き声や姿に馴染み、慰められることもあったせいであの頃とちつとも変わらない声を聞かせてくれるこの小さな生き物達に親しみを感じながら懐かしみ、楽しむくせがある。

最近気がついて驚くのはめつきり見かけなくなった雀たちのことである。年中人里のまわりに群がり、よくしゃべり、歌われ、詠まれ、語られ、最もよく見かけていたあの雀たちである。どこへ行ってしまったのだろ

う。

怪訝に思い続けていたところに、何が起こるかわからないことが起こった。

その日の朝も家内が日課の始まりとして室内で飼っている犬のジョイを連れて庭に出た。ほどなくだしぬけに奇声が聞こえたので何ごとかとあわててドアを開けると、両手を揃えかなり興奮した面持ちで、「雀が、雀が！」と言い乍らかけ寄ってくる。息をはずませながらの説明は次のとおりである。

ふと草の上にしやがんでいる一羽の小鳥が目にとまった。よく見るとそれは紛れも無く雀だった。おずおずと近寄ってみても逃げようとしないう。それどころかよちよちと寄ってくる。「おいで」と声をかけながら手を差し出すともっと近づいてきて、驚いたことに何と自らジャンプして

手の平に飛び乗ったという次第。(ミラクルの瞬間であった)

さて、二人はあわてだし、てんやわんやが始まった。

とりあえず片付けてなかつた子犬用の手提げのケージに入ってもらい、必要を求めにホームセンターへと急いだ。万全の準備を終えて鳥籠に入れる。子雀に違いないと言って家内は早速「スーちゃん」と命名。この時からわが家の家族となる。

籠に入れると怯えるようにあばれ、羽を広げたまま底で腹這いになった。目を離せなくなり足繁く様子を見に来る。次第にあばれなくなってきたがまだ飛べない。付属の水や餌の容器には目もくれないので小皿に入れ替えて側に置く。翌朝、さんざん散らしながらも食べたあとがみられたのでほっとする。二日目あたりからは近づく度に飛び跳ねて柵にしがみつくようにはなつたが、止まり木までは飛べないので低い位

置に追加してみた。やがて天辺まで飛べるようになった。かなり接近しても驚かなくなり、嬉しいことに雀の方から寄ってくるようになり、ついには指を差し出すと柵にしがみつき乍ら羽をばたつかせ、「チチチチ」と可愛い口ばしでつつくようにまでなつてきた。

するとある時、だしぬけに「ピーーツ」と驚く程大きく透明な声がか中に響き渡った。家内と顔を見合わせる。その回数が増えるにつれてもつと驚くことが次々と起こるようになった。それは雀がこれほどまでの多彩な声音をもっていたのかということである。私達はおそらく誰も聞いたことのないはずの雀の「スーちゃん」の歌唱力を知り、称えつつ、楽しめる幸せを味わった。

しかし、そんな日は長くは続かなかつた。

家内が手入れのために籠を外に持ち出したのはよかつたが、ふとした

はずみでバランスが崩れ、籠が横倒しになった。その時入口の扉が開いて出口となり、いとしの「スーちゃん」は一目散に飛び出たが、近くの垣の木の低い枝に止まってしばらくじっと家内を見詰めたあと、裏の方に飛び去った。涙して呆然と立ち尽くす家内。いずれ自然に返すつもりだったが、あつけない幕切れとなった。

するとまた、それから間もなく信じがたいことが起こった。群で鳴く懐かしい雀のさえずりが聞こえるのでその場所を確かめようと窓に近づいた。何と、そこから見える屋根の縁に久しく見ていない四羽で並ぶ雀の姿があるではないか。次の瞬間下方から一羽の雀が一直線に飛んで合流したとたん、一斉に声を出しながら大空に飛んでいった。

その後家内は庭に出るたびに、再びあの雀に出会えないかと周辺を見廻す。